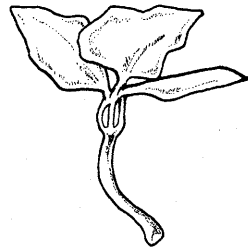


“人”との関わり

大下 祥子



“人”その一人一人が尊厳を持ち、多様に生き、考え、行動する。〈大人、子供〉〈男、女〉〈日本人、外国人〉群を作って他を排除し、差別をする。便利かもしれない。しかし違った一人と出会うこと、そこに、不思議なおもしろい世界を見つけることができる。

主婦の立場からこの十数年のひととの関わりを書いてみる。

我子との関わり

「ただ今」何の愛想もなく玄関に入ってくる息子。中

学三年、世間で言う高校受験生である。八月七日の朝東京を自転車で出発してから十七日目。全身真黒、ただ手のひらと握った指の先だけを白くして北海道から帰ってきた。前年九月から毎晩筋肉トレーニングと称して腹筋、腕立て伏せをしていた。三か月、半年と続けている様子に、なかなかやるわいと感心はしていたが、それが北海道自転車旅行の準備とは知らなかった。一学期が終わると早々に世田谷の家を早朝出発。持ち物は着替え、寝袋、地図、郵便局の預金通帳、その他自転車の修理道具とかなりの荷物。マウンテンバイクのあちこちにぶら

下げていく。初日は宇都宮。夕方待ちに待った電話と受話器に飛びつくと、「こちら宇都宮警察ですが……」の言葉に心臓の止まる思い。家出人と間違えられ、その確認の為の電話。受話器の向こうの警察の方に私が励まされたが、当の本人は、最初から「犯人扱いされ」憤慨し、夜の宿を色々教えて下さったのにもかかわらず、近くの公園で野宿をしたという。何しろ一人旅、いくらのもん気な親、いくらいつも手を焼かせてばかりの息子でも心配く。何の情報も入らぬ一日を唯々夕方の無事の電話を待ち、何も手に付かない毎日。野宿あり、駅の構内あり、ユースホステルありで無事八日目に目的地である北海道八雲町の叔母の家へ到着。八雲町という道路標識が見えた時「僕、鳥肌が立っっちゃったんだヨ」。途中食事の為に立ち寄った食堂の方に水筒の水を入れて頂いたり、輸送中のトラックのお兄さんにパンをもらったりと、多くの方の親切もたくさん頂きながら自転車のペダルをこぎ通したという。

この息子、我家の次男坊。小学校の時は親も本人も一

日一日を過ごすのに大変なエネルギーを必要とした問題児で、小学二年生の時、担任の先生の「大下君は机の上に足を乗せて考えるんですよ」には大汗、躰の悪さに恐縮することしきり。しかし先生は「いいんですよ。彼は今、それが一番安定し物を考えやすい姿勢なのですから、今は目をつぶりましょう。お母さんは気になるでしようけれど」。又、四年生になると、新任の先生が受け持ちとなり、我息子の為に授業にならない毎日。授業中気に入らなければ暴れてしまう。何が原因か分からないとのこと。何回も先生と話し合いを重ね、とうとう連日、授業参観をすることになる。私が見ているといやがりもせず何とか落ちついて授業を受けている。落ちついたかなと頃合いをみて授業参観をやってみると、「ええ、今日は静かでした。一人で飛行機を飛ばしてしましたから」。又六年生になると、少々クラスの友達をいじめている、自分とは気が合わない友達と校庭の真中で取っ組み合いのけんか。揚句の果て自分のメガネはグチャグチャ。そのメガネの修理代は、お年玉と毎月（五

百円)のおこづかいから二年程かけて返済した。又、あの晩余りに言う事を聞かなかったので「家を出て行きなさい!」。するとリュックサックに何やら詰め込んで出て行くとする。二歳歳上(六年生の時だったと思う)の長男が、「ゆたか! 寒くなるから上着を持って行けよ」「暗いから懐中電灯持って行け」「お金足りないだろ?」と兄妹の有り金全部を持たせて、さあ出発。そのすぐ後を長男が追いかけて行き、暫くすると二人で戻ってくる。ひと部屋に兄弟三人入り込み何やらゴソゴソ。「お母さん布団、この部屋に運んでもいい?」こちらは怒り返事もしない。三人で苦勞して布団を運び静かになる。そーっとのぞきに行くと、

「ごどものキャンプ、おとなは入ってはいけません」と襖に張り紙。これで三人は家出をしたつもり、親に精一杯の抵抗を三人で結託して決行したらしい。翌日はケロッと三人起きてきてこの事件も一件落着。この次男、私の生活思考の枠からかなり外れたことをするので親子のけんかが絶えないが、兄弟とは有難いもの、親の

できないフォローを上手にしてくれる。ある晩二段ベッドの上に兄、下に弟が寝ていたが、兄から「ネー、ゆたか、トキ麻中の蓬助よもぎすけけずとも起こし」って知ってるか?」弟「知らないよ!」兄「良い友達の中で育つと良い子になるっていうこと、良い親に育つと良い子になるっていうこと」弟「フーン」後から振り返ってみると楽しい子育てではあるが、怒り、悲しみ、頭を下げる毎日、エネルギーを吸い取られ、楽しみ、喜ぶゆとりのない何年かを過ごしたことになる。

その次男、中学校に進学したと同時に普通の子供に変身してしまつた。朝は三、四十分前に登校し一人朝自習(担任の先生がそつと教えて下さつた)、もちろん無遅刻無欠席。小学二年生の時には、学校へ行かないと頑張り、学校まで十分間程の道を大声で泣き叫ぶ息子を引きずって行ったことがあつたっけ。その後も神経性の下痢が続き病院へ。今は部活も一日も休まず、あまり活発な部ではないので部員が一人も来ないことがあるという。そんな時は顧問の先生と親しく色々の話をしてくるとい

う。帰宅すると顔を合わせた兄妹と寝るまで賑やかに遊んでいる。受験勉強中のはずの中学三年、テスト中でも夜九時半には床につく。

テレビ無し、冷房なし、暖房は掘りごたつ一つ、外食はまったくしないし、ファーストフードを利用したことはない。もちろん塾へも通わない。何も無い家の中で有るのは親、兄弟だけ。自分達で探し、発見しなければ遊んでくれる物は無い。末娘が幼稚園年少の春休み、五日間かけて、家族全員で鎌倉稲村ガ崎まで徒歩旅行をした。小鳥の歌を聞き、春の花を探し、土筆を採り、楽しい体験をした。暇な時は本でも読むしかない。

長男は物臭、高校二年生の今まで受験勉強はおろか、普段の勉強、宿題さえやったことがないというつわもの。小学生の間は本だけが友達。近くの図書館が自分の本箱のつもり、朝から寝るまで本を読んでいる。そんな状態だから、朝学校へ送り出すのに一苦労。本を読み始めたら時間なんて関係ない。三年生の時の担任の先生、「学校で教えることなど、たいした事はない。好きなら

け読んで、来なくなったら学校へいらっしやい」の言葉に親は気持ちが悪くなり、それに従い、長男は、遅いなからも自ら家を出るようになった。学童擁護（みどりのおばさん）の方には、「大下君が通過するのを見届けてから学校へ引き揚げるのよ」と言われましたけれど。

自分を徹底的に主張するのが末娘。思ったことを何の遠慮もなくすべて言葉にしてしまうので、ここで又親子げんか。先日は学校の授業中図工の先生に、自分達の自由を画かせてほしいと抗議したという。帰宅し、母親にそのことを報告。最後に、「だって自分の考えを押し付けるのとお母さんと同じなんだもん」、これからも苦労が続きます。

お年寄りとの関わり

体力のみが勝負の子育てと並行して、十年間半身不随の姑との生活がお年寄りとの関わりでのスタートになる。いろいろな確執を体験しながらも、その大役を終えると、何か大きな財産をいただいた様に思える。最後の二

年間お世話になった特別養護老人ホームへ引き続きおむつをたたみに通う様になる。ホームのお誕生会には、娘のピアノを聞かせてあげたり、私と娘で歌をうたったり、又、娘の小学校のクラス全員で「風船バレーボール大会」をしたり、有志でおむつをたたんだりと今でも関わりが続いている。

又、近所の一人暮らしの八十八歳のおばあちゃんのお宅へも通うようになる、始めのうちは、近くの医院への付き添いが主な仕事だったが、齢を重ねるうち、普段の生活も不自由になり、買物、食事の世話とほとんど毎日するようになり、五年間九十三歳まで通う。一人暮らしができるという事は、自分をしっかり持ち、あくまで頑固に生きること。当然、身内、特に嫁との関わりは難しい。私の様な第三者が関わる方が何かとスムーズにいにくい。その方とは、お医者様へお連れする道中、私の背中でお別れすることになる。途中具合が悪くなり背負って医院へ着いた時には事切れていた。常々、一人で死にたく無い、苦しむのはイヤ、寝たきりになりたくな

い、とおっしゃっていた通りの大往生だった。

現在は、老人ホームの八十三歳のおばあちゃまの所へ通っている。八十三年間の生きた軌跡と知恵と考えをうかがう度に与えて頂き、毎日すばらしいお土産を頂くことができる。体力的には少しずつ弱られる五年間ではあるが、人間として生き尽くすことのすばらしさを感じ、その少しでもお手伝いできればとの思いで通う日々である。

障害児とのかかわり

世田谷区立幼稚園の障害児の教育補助員を始め、二年が過ぎた。区の補助員の職務内容は、「障害のある幼児の介助及び担任教諭補助」となっている。私のクラスには、自閉的傾向の男児、発達遅れの女児の二名がいる。本来ならこの二人にびったりと付き添い介助をしなければならぬのであろうが、私は最小限安全のみを確保するとし、クラス全体、関わりのある幼児全員の中の二人という関わりの中で補助を務める。子供はシビアである。邪魔にする時だってあるけれど、逆に障害のある幼

児のちょっとしたことでも素直に認め感心することもある。自然に／＼二年間の生活の中でお互いの存在の価値を感じられたら良いと思っている。そうする中で、驚く程の発達をしていくのを目を見張る。自閉的傾向をもつ男児が友達の中へ入り嬉々として追いかけてこをしたり、反対に困っている友達の世話をしたり、発達遅れの女兒が毎日ピョンピョンの両足跳びを「先生やって」と手をつないでしている内、上手に自分で跳べる様になり、又それが他の発達にも広がり、大勢でいくつまで跳べるか競争する中心人物になったり。わたしの想像だにしない発展をみせてくれる。

ここでも、又、精一杯生きることのすばらしさを学ばせてもらうこととなる。

我が子もお年寄りも障害のある子供達も、私自身の中で同じ基盤でつながっている。日々の生活はこの他に、小・中・高校のPTAの委員、青少年地区委員、児童館の父母の集まりの世話役、何でも声がかかれば乗って

く。完全でない私が少しでも広く大きくなれる様にと。又、多面に関われば関わる程自分の未熟さ、不完全さに気づき、まだまだ学ぶこと学ばなければならぬことを思い知らされる。近所では有名な足で稼ぐ日々に、末娘は言う「お母さん何でもハイハイと良い返事ばかりしないできちんと断ればいいじゃないの、お母さんが引き受けなくても他の人がやってくれるのよ!」。理解してくれていると思うのは私の倣り、家の者はやはり自分達だけの母親でいてほしいのだ。だが待てよ! 私も子供の頃、今の私と同じ様にほとんど家にいない母親を何とからめしく思っていたことか。だが今、その時の母の行為、思いを理解し誇れる。この原稿もその精神で安直に引き受けてしまったが、これからも誇れる体力を元に、楽しみながら人との関わりの中で財産を作っていくことにしよう。

(元・幼稚園教諭)